

「ふるさと」の変遷とそれに対する大学生の行動変容特性について

西上広貴¹・上月康則²・山中亮一³・尾野薫⁴・平川倫⁵

¹学生員 徳島大学大学院先端技術科学教育部 (〒770-8506徳島市南常三島町2-1, E-mai:c501631014@tokushima-u.ac.jp)

²正会員 博士(工) 徳島大学大学院理工学研究部 (同上, E-mail:kozuki@tokushima-u.ac.jp)

³正会員 博士(工) 徳島大学大学院理工学研究部 (同上, E-mail: ryoichi_yamanaka@tokushima-u.ac.jp)

⁴正会員 博士(工) 徳島大学大学院理工学研究部 (同上, E-mail: kaoru_o@ce.tokushima-u.ac.jp)

⁵学生員 徳島大学工学部建設工学科 (同上, E-mai: c501301015@tokushima-u.ac.jp)

「ふるさと」という言葉を使った地域創生の取り組みが各地で行われている。取り組みに参加、活動する人の数を増やす一助とするために、①「ふるさと」という言葉に着目し、その意味、概念、使い方を整理し、②活動する人の特性をモデル化することができた。「ふるさと」に関する研究、辞書、歌詞のいずれにおいても、最近では、「ふるさと」への心情的、精神的な内容へと変化している傾向が見られた。また「ふるさと」のために活動する大学生の特性をモデル化したところ、『思い』、『保全意識』→『意欲』→『行動』へと発展する過程を説明できた。ただし、『意欲』から『行動』へと移るときに学生数は急減しており、その要因として「ふるさと」への働きかけの経験が不足し、観念化していること、またこの課題解決方法を提案することができた。

キーワード:ふるさと, 行動変容, 概念変遷, 歌詞, 辞書, テキストマイニング, 共分散構造分析

1. はじめに

(1) 背景と目的

地域創生の取り組みが各地で活発となる一方で、過疎化の進んだ地域では「地域のために何かをする人」を増やすことも大きな課題となっている¹⁾。そこで、最近では、地域に「ふるさと」をラベリングし、援助を呼び掛けることが、各地で行われるようになっていく。

例えば、『緑のふるさと協力隊』では、「ふるさと」という言葉を使いながら、農山村で暮らし、活動する若者を募集している。また、『ふるさと納税』は、寄付を通して、「ふるさと」への貢献を呼び掛けるもので、その納税額は年々増加している。納税の理由には、“特産品がもらえるから”というものの他にも、“ふるさとを応援したいから”ということもある。他にも、『ふるさとづくり有識者会議(2013)』では、その趣旨に“日本人の心のよりどころであるふるさとを愛する気持ちを育み、誇りあるふるさとをつくるための基本理念や施策の在り方を検討する”ことが記され、地域の「ふるさと」化が一段と推し進められている。

つまり、地域を「ふるさと」とラベリングすることで、その地域への人の関心が高まり、なかには寄付を含む何らかの活動を行う人もいるようである。また地域を管理運営する立場の人は、その意識に期待して「ふるさと」という言葉を利用している。ただし、「ふるさと」の意

味は時代とともに変化している可能性もあるなか、それを定義づけて使用されている事例もわずかである。もし「ふるさと」が曖昧模糊のままであれば、「ふるさと」への働きかけが思わぬ結果となる恐れもある。

そこで、本研究では、「ふるさと」の概念を整理し、「ふるさと」に対して行動する大学生の特性を明らかにすることを目的に、調査研究を行った。

(2) 本研究の流れ

本研究は以下の3つの手順で行われた。

- ①: 研究、世相、意味での「ふるさと」の言葉の概念の変遷を文献調査によって明らかにし、近年の「ふるさと」の扱われ方とその背景を明らかにする。
- ②「ふるさと」への意識と態度に関するアンケートを大学生に対して行い、「ふるさと」への行動変容に関するモデルを作成する。
- ③「ふるさと」の概念と大学生の行動変容特性から、「ふるさと」のために活動する人を増やすために有効な方策について考察する。

2. 「ふるさと」に関する既往の研究レビュー

「ふるさと」という言葉を扱った論文や報告資料を収集するために、CiNiiのサイトで「ふるさと」、「郷

土」, 「意識」, 「愛着」といったキーワードで検索し, その中からふるさとへの意識などを扱ったものを抽出した。その結果, 114件の文献が収集され各資料を整理し, 年代ごとの「ふるさと」研究とその変化について考察を行った。

1970年代には, 居住地によるふるさと意識の差異に関する論文が見あたる^{2) 3)}。これは, 1960年代に都市圏へ移り住む人が急増し, 居住地が生まれ育った地域と異なる人が増加したことを背景にされていた。1980年代には「最近になって, ふるさと運動とも呼ばれる村づくりやまちづくりが出現している」川合⁴⁾ (1987) と, 「ふるさと産業おこし運動 (1985年)」などのふるさととまちづくりに関する論文が多数現れる^{5) 6)}。1990年代は, 地域のアイデンティティの形成を扱ったもの^{7) 8)} や, 都市とふるさとの関係を扱ったもの^{9) 10) 11)} が増える。

2000年代になると「心のふるさと」^{12) 13)}, 「ふるさととは抽象的であいまいなイメージで構成される」中村¹⁴⁾ (2004), 「心のよりどころ」河田ら¹⁵⁾ (2006), 「郷土の本質は感情, 心情にある」山口¹⁶⁾ (2006) と感情的, 精神的な視点から「ふるさと」を扱う論文が目立つようになってきた。

モリソン¹⁷⁾ (2015) は, 近代の「ふるさと」の意味の変遷について, 「近代までは, ふるさととは, 「旧都」の意味が強く, そこから「出身地」としての意味へと変わっていった。近代の国民国家が成立されると, 田園風景が失われていき, ふるすとは国民的アイデンティティを支える「真」の伝統文化を継承した場所としても見なされるようになった。このように「ふるさと」が記号化されていく一方で, 日本人の「ふるさと」への執着は一度もやむことはない」と述べている。確かに2010年代には, さらに「ふるさと」への愛着や帰属意識という内容がテーマとなっている研究^{18) 19) 20) 21) 22)} が増え, 政策面でも『ふるさとづくり有識者会議 (2013)』など, ふるさとを愛する, 誇りとする, 帰属意識を高めるといったことが各地で議論されている。

以上のように, 「ふるさと」については, 意識からまちづくり, 愛着, 誇りなど心情的な内容へと扱われるテーマが変化してきていることがわかった。ただし, 本研究のテーマである「ふるさと」への社会意識から「ふるさと」のための行動へと変化する過程を扱ったものはみあたらなかった。「ふるさと」を活用した地域づくりへの期待を確実なものとするために, 本研究で「ふるさと」への意識から行動への過程を分析し, 有効な方策を検討することには, 新規性, 社会的意義があると言える。

3. 「ふるさと」の意味・概念の変遷

(1) 分析対象の選定

言葉の意味は, そもそもその漢字の語源などに依るもの他に, 社会での用例によって言葉に付与されていくものもある。辞書や辞典が版を重ねるのはそのため, 社会的背景, つまり世相を反映して, 言葉の意味は変わっていく。そのことから, 言葉の意味, 概念を知るにはまずは辞書, 辞典に掲載されている内容にあたるのが最も基本的な作業と思われる。

また, もっと世相や人々の意識を映したものの一つに, 歌がある。鈴木ら²³⁾ (2000) は「「流行歌」には, 時代ごとに特徴的な歌詞が用いられていると考えられる」と述べている。人はその歌詞に共感し, 作詞家は共感されるべく歌詞を作成する。つまり, 歌詞はその当時の人, 社会の認識を把握する手段として, 効率的である。

以上の事から, 「ふるさと」の概念の変遷を調べる手段として, 辞書, 辞典, さらに歌の内容を取り扱うこととした。

(2) 辞書で定義される「ふるさと」の意味

1963年～2015年までに出版されている国語辞典や古語辞典の52の書籍から「ふるさと」を索引し, 意味を調べ, その種類や年代ごとの変化をまとめてみた (表1)。

その結果, 「ふるさと」の意味は, 計14種類あったが, 年代によってその意味や出現傾向は異なっていた。年代にこだわらず, ずっと出現している意味は, 「生まれ育った」, 「以前から住んでいる」, 「古く荒れた土地」, 「なじみのある土地」である。ただし, 最後のものは, 辞書への掲載率は20%以下と今ではあまり使われていないようである。また当初はあったが, 最近では掲載されなくなったものには, 「昔都があった場所」というものがある。最近になって掲載, あるいは掲載率が向上しているものには, 「ある物事や精神をはぐくみ育てた, 源となるところ・もの」, 「精神的なよりどころ」, 「自宅の謙称」, 「その人が短らぬ歳月住んでいる土地」などがある。前者の2つは, 2. でも述べたように, 最近では「ふるさと」と精神的なものを結び付けて, 使用されることが多くなっていることが辞書にも表れている。

(3) 歌詞 (世相)

歌詞検索サービス・歌詞ナビで曲名に「ふるさと」が入る曲 (以下, ふるさと歌) を検索したところ, 1851年故郷の人々 (スィープ・フォク) から始まり, 民謡, 演歌, 歌謡曲からJ-POPまで計84件の歌が抽出された。これらの歌を年代ごとに分け, テキストマイニングソフト (KH Coder 2.00e) を使って歌詞を解析し, 頻出語などを表2に整理した。

表-1 「ふるさと」の意味とその種類数

	ふるさとの意味	年代				
		1970-79	1980-89	1990-99	2000-09	2010-15
1	生まれ育った	◎	◎	◎	◎	◎
2	以前から住んでいる	◎	●	○	●	△
3	昔、あることがあった土地	◎	×	×	×	
4	古く荒れた土地	●	△	●	●	△
5	なじみのある土地	●	△	△	×	×
6	昔都があった場所	△	×	×	×	
7	前にしばしば行ったことのある土地	×	△			△
8	ある物事や精神をはぐくみ育てた、源となるところ・もの		×	×	△	△
9	先祖代々住んでいる土地		×	×	△	
10	精神的なよりどころ		×	×	△	×
11	自宅の謙称		×	×	×	×
12	女陰の異称		×		△	
13	「こきょう」の文化的な表現		×			
14	その人が短らぬ歳月住んでいる土地				×	×
	種類数	7	13	10	12	9
	辞書の数	9	10	11	12	10

※掲載率 ◎：81～100%，○：61～80%，●：41～60%，△：21～40%，×1～20%

1851～1969年の11曲のふるさと歌には、「呼ぶ」という言葉が多く使われていた。「呼ぶ」という単語は山、川、鳥、夕日などの自然を呼ぶ意味で、感動詞の「おーい」も「呼ぶ」にかかった単語である。「いま」という言葉は、あの頃という過去に対する位置づけで歌われている。また、69年以前のふるさと歌は全て民謡であったが、その頻出語には「父母」がいる「遠い」ところを連想させる単語が並んでいた。また形容詞の頻出語からは、「懐かしい」、「さびしい」といった単語が多かった。

1970～1999年には、演歌にもふるさと歌が現れ、特に「今」、「心」や、形容詞では「遠い」という言葉の頻出度が高く、その傾向は現代にまで続いていた。特に、「今」は歌詞の中で「今も」と使われることが多く、過去から続くものとしてふるさとが位置づけられたものである。2000年以降では、「帰る」という単語の頻出率も高くなる点が特徴で、「ふるさと」が帰る場所として位

置づけられていた。また「ありがとう」もよく歌詞に使われていた。

以上、ふるさと歌の中で歌われる「ふるさと」は、自分は「ふるさと」の外にいて、それは「遠い」場所にあるということは共通している。ただし、心情や態度は時代とともに変化しており、1970年頃には「ふるさと」は父母のいる具体的な場所で、山などに向かって呼びかけたくなるものであった。しかし、近年では、「帰る」ことを意識する、感謝の言葉を投げかける対象として扱われていた。このような精神性、愛着などを「ふるさと」に付与する傾向は、辞書にある意味や施策にもみられており、社会全体の意識、態度と言える。

表-2 ふるさと歌で頻出する言葉

a) 頻出語

順位	1969年以前	1970-99	2000-09	2010-16
1	故郷	ふるさと	ふるさと	ふるさと
2	ふるさと	故郷	帰る	故郷
3	呼ぶ	今	故郷	帰る
4	父母	心	今	今
5	夢	人	心	人
6	旅	歌	いつ	心
7	山	忘れる	夢	忘れる
8	いつ	好き	場所	風
9	胸	深い	涙	空
10	いま	しあわせ	空	夢

b) 形容詞

順位	1969年以前	1970-99	2000-09	2010-16
1	遠い	深い	遠い	遠い
2	赤い	強い	ない	優しい
3	長い	古い		懐かしい
4	懐かしい	難しい		いい
5	さびしい	優しい		ない

c) 感動詞

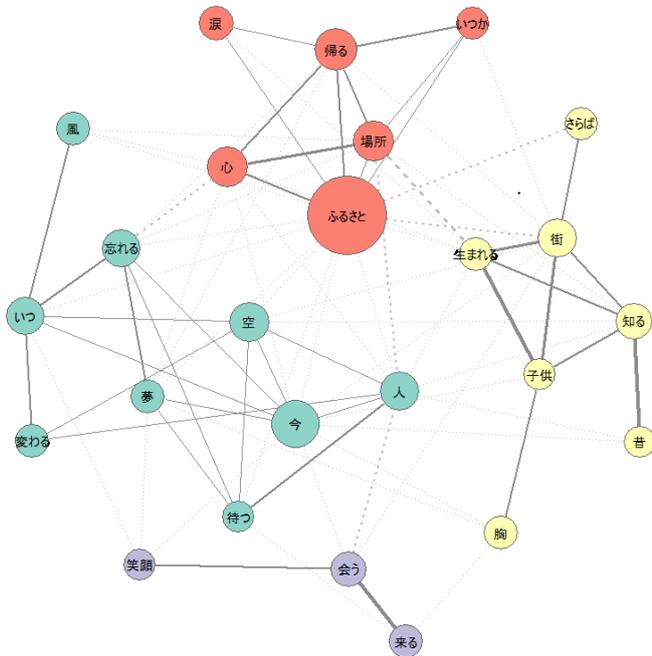
順位	1969年以前	1970-99	2000-09	2010-16
1	さらば	ああ	ああ	さらば
2	ああ		ありがとう	ありがとう
3	おお			
4	おーい			

次に、演歌は50代以上の世代、J-POPは若者の世代に親しまれ²⁴⁾、各世代の人の心情が歌われていることから、両ジャンルの歌詞を比べることで、世代間の「ふるさと」意識が把握できると考えた。なお、J-POPは2000年以降に生まれた新しいジャンルの音楽であり、ふるさと歌21曲もこの間に発表されていた。また、演歌45曲のうち36曲は2000年以降に発表されており、ジャンルは異なるものの、ふるさと歌が発表されているのは同時期であることがわかった。

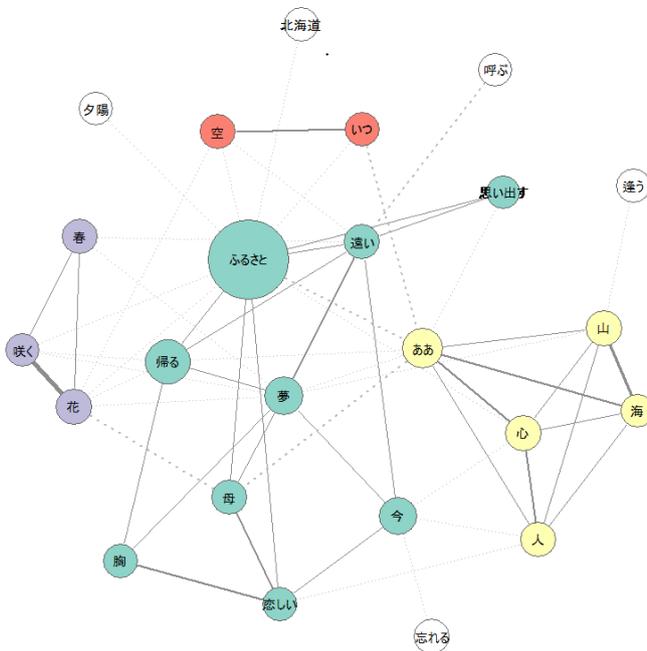
演歌では、全文章数が2,018で総抽出語数は6,141語で

あった。J-POPでは、全文章数は1,509、総抽出語数は6,173語であった。抽出された語のうち、J-POPは出現回数12回以上（ノード15）、演歌は出現回数11回以上（ノード24）の語と語の共起ネットワークをFrucherman & Reingold方法により作成した（図1）。

図より、演歌では、「ふるさと」は「遠い」、「夢」



a) 演歌 (45曲)



b) J-POP (21曲)

図-1 ふるさと歌を対象とした共起ネットワーク図

にみるところで、「帰る」と思うが果たせていない、「恋しい」と思うものと描かれている。J-POPでも、同様に、「ふるさと」は「いつか」、「帰る」、「場所」

とされている。

両ふるさと歌で異なる点は、演歌には「海」、「川」、「空」、「花」と具体的な自然物が多く、それに「ああ」などと「心」を寄せているが、J-POPでは自然物は「空」が出てくる程度で、それに心情が重ねられることはなかった。また「心のふるさと」という実際に生まれ育っていないところに「ふるさと」意識を置く経験が扱われていた。生まれた場所は、演歌では、自然豊かな地方で、そこには「恋しい」、「母」がいる一方で、J-POPでは、「街」で「生まれる」ことが歌われていた。

このように、歌詞からも、演歌とJ-POPに親しむ世代の「ふるさと」意識は異なっていた。演歌に親しむ年代の世代は、自然豊かな「ふるさと」を離れ、「心」を実際の「ふるさと」の自然物に寄せるなど、実体験を基に意識づけられていた。それに対し、J-POPの若者のそれは「心のふるさと」などと、「ふるさと」を観念化、抽象化する傾向にあることがわかった。

以上より、「ふるさと」は具体的な経験がある場所から、観念的で抽象的な場所へと、近年に近づくにつれて意味が変化していることが明らかとなった。

(4) 小結

辞書と歌の解析より、「ふるさと」は抽象化、観念化されてきているということがわかった。辞書では、「生まれ育った」など変わらない意味もあるが、精神的な意味も付与されていた。また、歌詞にも「帰る」、「心」などと以前から変わらない言葉は使われているが、その対象とする「ふるさと」の実態は以前は、実体験に基づいたより具体的なものであったが、最近では「心のふるさと」などと実体性の弱いものにも意識が持たれており、辞書と同じ傾向が認められた。

4. 大学生の「ふるさと」意識と行動変容

(1) 分析対象の選定

本研究では、大学生を対象に「ふるさと」への行動変容分析を行った。大学生は、地方創成を支える人材の中で最も期待される世代である。また、行動変容において課題が抽出できた場合には、大学教育の中でその対策を講じることができるという人材育成面でも大学生を対象にするということが良いと言える。

(2) 分析の手順

①：アンケート調査：大学生1年生を対象に「ふるさと」に対するアンケートを行い、意識と行動変容を把握することを試みた。アンケート調査は2016年6月に徳島

大学1年生97名を対象に実施した。質問項目の概要は以下の表3の通りである。

- ②：若者世代の代表性についての妥当性：「ふるさと」に対する自由記述と若者世代の意識を反映するJ-POPの歌詞の解析結果とを比較した。
- ③「ふるさと」意識要素の把握：アンケート結果の因子分析を行った。
- ④大学生の「ふるさと」への行動変容特性の把握：共分散構造分析を行った。
- ⑤行動変容における課題：③、④の結果と3章の結果を併せて、大学生の「ふるさと」に対する行動をより積極的にする点について考察を加えた。

表3 アンケート内容

問	質問項目
1	「ふるさと」の内容をよく表わしていると思うものに○をつけて下さい。
2	あなたの「ふるさと」はどれにあてはまりますか？
3	問2で「ふるさとは無い」と回答した人へ「ふるさと」を欲しいと思いますか？
4	あなたは、人は「ふるさと」を必要だと思いますか？
5	あなたは「ふるさと」の環境を保全、守りたいと思いますか？
6	あなたの「ふるさと」の自然度について教えてください。
7	あなたは「ふるさと」への愛着はありますか？
8	あなたは「ふるさと」のために、実際に何か活動していますか？
9	あなたは「ふるさと」のために、何か活動したいと思っていますか？
10	共に「ふるさと」のために何らかの活動をする仲間いますか？
11	あなたの「ふるさと」を誇りに思っていますか？
12	あなたの「ふるさと」を維持することに、あなたにも責任があると思いますか？
13	あなたは「ふるさと」のために役立つなら、何か『負担』をしても良いと考えますか？
14	あなたは「ふるさと」の環境や社会の存続に危機感があると感じていますか？もし、あるとすればそれは何ですか？
15	次の言葉の内容を知っていますか？ (1)緑のふるさと協力隊 (2)ふるさと納税
16	次の文章は正しいでしょうか、誤っているでしょうか？番号に○をつけてください。
17	あなたにとっての「ふるさと」の位置付けについて教えてください
18	「ふるさと」のために、あなた自身はどのようなことをしてもいいと思いますか？当てはまるもの全てに○をして下さい。
19	現在のあなたの「幸福度」はどの程度ですか？(11段階)
20	あなたにとっての「ふるさと」とはどういうものですか？(自由記述)

(3)徳島大学生の「ふるさと」意識の代表性

問20の自由記述から頻出単語を整理し、各ジャンルの歌詞と比較してみた。大学生の文章と歌詞とが重なっていたのは、「場所」、「帰る」、「心」の3つであり、全て重複していたのは、J-POPであった。回答した本学生は18、19歳とまさにJ-POPに親しむ世代であり、本結果は概ねそれを反映した結果となっていた。以上のことから、ここで得られた結果は一般的な若者世代を代表するものとして扱っても大きな問題はないと思われる。

表4 自由記述とふるさと歌での頻出単語の比較

順位	大学生	J-POP	歌謡曲	演歌	民謡
1	場所	今	心	帰る	父母
2	自分	帰る	今	夢	旅
3	育つ	心	人	今	胸
4	住む	場所	風	花	山
5	帰る	空	忘れる	山	夢
6	安心	街	海	遠い	水
7	自然	人	泣く	心	昔
8	心	いつ	歌	空	川
9	落ち着く	忘れる	帰る	母	長い
10	思い出	知る	生きる	忘れる	年月

※いずれのジャンルの歌詞も頻出第一位は、「ふるさと」であるがここではそれを除き、整理した。

(3)社会意識からの行動変容

a) 因子分析

本研究では、共分散構造分析の指標とするため、SPSS Text Analytics for Surveysを用いて最尤法・Promax回転による、因子分析を行った。なお、分析したデータはアンケートで7段階評価をした21項目である。

その結果、5つの因子に項目を分類することができた。第一因子は「環境を保全したいか」、「愛着」、「誇り」の3項目で構成されたため『ふるさとへの思い』と名付けた。第二因子は「活動したい」、「活動している」、「自然度」、「負担しても良い」の4項目で構成され『行動と意欲』とした。第三因子は「育むもの」、「守るもの」の2項目で構成され『保全意識』とした。第四因子は「維持することへの責任」、「父母が住んでいるところ」の2項目で構成され『責任』とした。第五因子は「想像するもの」、「遠くで思うもの」の2項目で構成され『離れている』とした。

b) 共分散構造分析

因子分析の結果から、分類された第一から第三因子を参考にし、ふるさとを想う気持ちから実際に活動するに至るまでの関係を明らかにするため、最尤法による共分散構造分析を行った。

その結果、図2a)のように、ふるさとに対する『思い』や『保全意識』から『意欲』へと至り、最終的に『実行』する過程が見られるモデルが得られた ($\chi^2=16.2$, GFI = .960, AGFI = .910, RMSEA = .011, RMR = .080) . つまり、ふるさとに対する「愛着」や「誇り」といった『思い』と、「守る」、「育む」といった『保全意識』を持つだけでなく、「活動したい」、「負担してもよい」という高い『意欲』が持たれた場合に初めて、「ふるさと」のために「仲間を持ち」、何らかの「活動」が行われていることがわかる。

ここで、図2a)のモデル中の観測変数のデータを集計すると、『ふるさとへの思い』である「保全したい」、「愛着」、「誇り」や、『保全意識』の「育むもの」、「守るもの」については大半の学生が肯定している。

(図3) また『意欲』の「活動したい」、「負担してもよい」(62名)についても約半数が肯定的であった。しかしながら、「ふるさと」のために『実行』の「活動している」(8名)、「活動する仲間がいる」(22名)と

なると、3分の1程度にまで急減しており、「ふるさと」のために活動する人を増やすためには、『意欲』から『実行』に変化させることが大きなポイントになることがわかった。

他にも、「想像するもの」、「遠くで思うもの」といった「ふるさと」から『離れている』という観測変数を用いて、構造図を作成しようと試みたが、適合されるようなモデルはできなかった(図2b), $\chi^2=30.7$, GFI = .926, AGFI = .833, RMSEA = .098, RMR = .150) . また『離れている』から『意欲』に至るパスが負の影響を示していることから、ふるさとから意識が離れている人は、活動には至ることは難しいことを示している。

(5) 小結

3章までで、近年「ふるさと」の概念が以前と比べてより、抽象化されていることを指摘したが、大学生へのアンケートからもその傾向が見られた。因子分析と共分散構造分析から『思い』、『保全意識』→『意欲』→

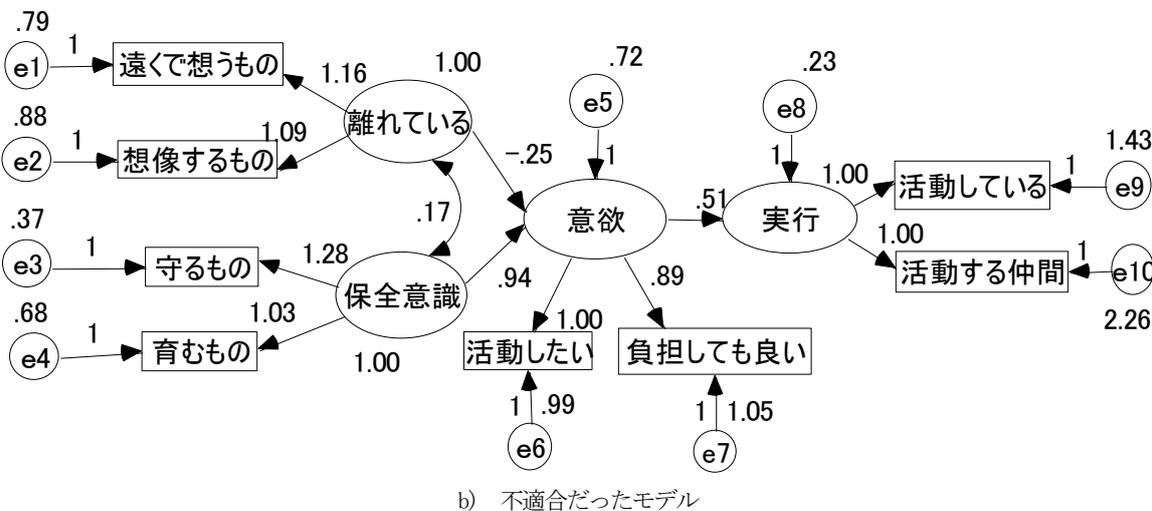
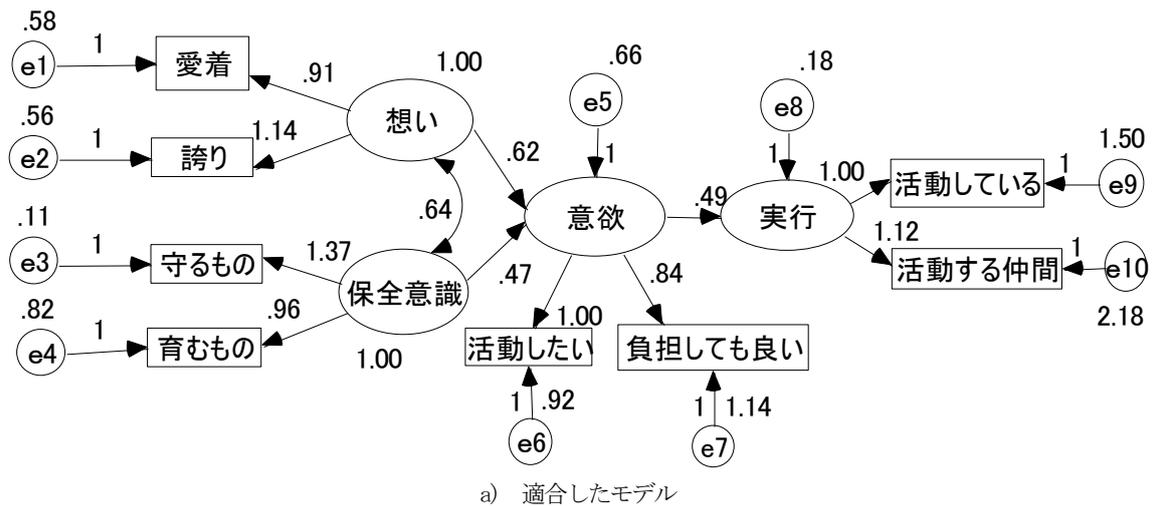


図-2 意識からの行動変容に関する構造分析図

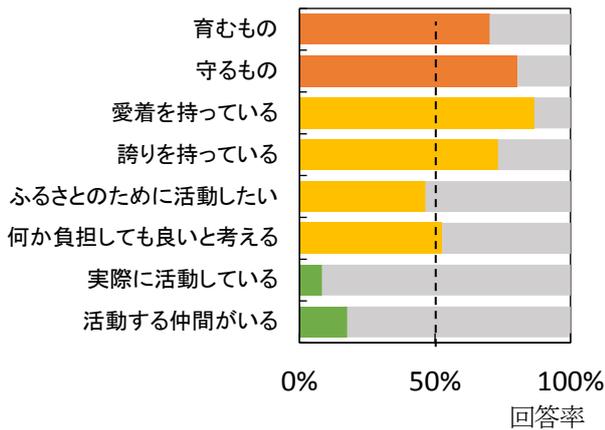


図-3 適合モデルの観測項目に「そう思う」と答えた人の割合

『行動』へと発展する過程を明らかにしたが、『意欲』から『行動』する学生は大きく減少していた。その原因として「ふるさと」の抽象化、観念化が考えられる。それは、実体を知らない、実体に触れた経験が浅い、手段がわからないといったことを招き、たとえ学生の『意欲』が高くとも、『行動』にまで至らないと思われる。

こうした課題解消のためには、まずは「ふるさと」をより具現化させる必要がある。その手段として、体験学習、インターンシップなどで、地域に触れ、その課題解決に向けた取り組みを行い、地域の魅力を認知し、「ふるさと」のラベリングをさせることが考えられる。また①大学教育においても地方創成の取り組みが精力的に行われていること、②大学生が「第2のふるさと」と生まれ、育った場所でないところに「ふるさと」のラベリングを行うことに抵抗が無いことから、これらの方法は有効で、かつ効果的と思われる。今後の課題としては、それを意図した実習などを行い、「ふるさと」のラベリング、『意欲』→『行動』へと移ることを観察し、本方法を評価することが課題である。

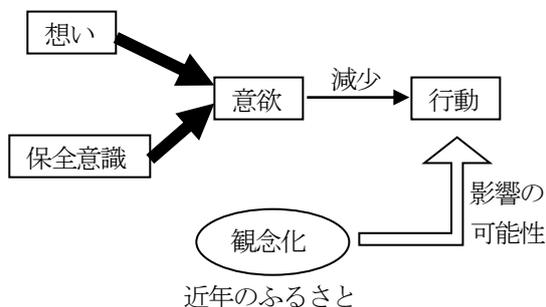


図-4 「ふるさと」への行動変容と課題

5. おわりに

「ふるさと」という言葉を使った地域創生の取り組みが各地で行われている。今後さらに取り組みに参加し、活動する人が増えるための一助とするために、①「ふるさと」という言葉に着目し、その意味、概念、使い方を整理し、②活動する人の特性をモデル化することができた。主な結果を下記にまとめる。

(1)「ふるさと」に関する研究内容は、1970年代には居住地の違いによる「ふるさと」意識に関するものが多く、続いてまちづくり、最近では愛着、誇りなど心情的な内容へと扱われるテーマが変化していた。

(2)辞書には、「生まれ育った」というものが「ふるさと」の意味として年代を問わず掲載されているが、「昔都があった場所」など見られなくなったものもある。一方で、「精神的なよりどころ」と近年になって掲載されるようになったものもある。特にその傾向は、J-POPの歌詞に多く見られ、世代間でも「ふるさと」意識は異なることが示唆された。

(3)「ふるさと」が歌われた歌詞では、1960年代には「ふるさと」を離れた実体験を基に、「ふるさと」の自然物などに心を寄せるような内容であったが、最近では「心のふるさと」や「ふるさと」に感謝するような歌詞もあり、より観念的に捉えられるようになっている。

(4)大学1年生を対象としたアンケートから、「ふるさと」のために活動する学生の特性をモデル化することができた。『思い』、『保全意識』→『意欲』→『行動』へと発展する過程を説明できたが、『意欲』から『行動』へと移るときに学生数は急減していた。この原因には、「ふるさと」の観念化、抽象化があり、課題解決のためには、地域での課題解決型の実習を通した、「ふるさと」へのラベリングを提案することができた。

参考文献

- 1) 内閣府：まち・ひと・しごと創生戦略 まち・ひと・しごと創生本部，pp. 54-55, 2015
- 2) 佐々木ひろみ，大原早苗，宮内貞子，富士田亮子，田中幸恵：瀬戸内海島しょ部の生活環境に関する基礎研究，家政学雑誌，No. 1/Vol. 29, 1976
- 3) 中村幸安：コミュニティ意識に基づく「ふるさと」の再定義（第一報地域分析），明治大学 科学技術研究所紀要，No. 9/Vol. 17, 1978
- 4) 川合元彦：ふるさと意識の実体を探る(1)-稲毛町の場合-，千葉大学教育学部研究紀要，第35巻，第1部，p119, 1987
- 5) 小栗宏：社会科の郷土，身近な地域，地域社会と自治省のコミュニティ，新地理，No. 3/Vol. 28, 1980
- 6) 種田守孝，篠原修，下村彰男：戦前期における風致地区の概念に関する研究，造園雑誌52 (5), 1989
- 7) 國吉和子：沖縄人（ウチナーンチュ）のアイデンティティと郷土意識(1)，沖縄大学地域研究所年報，第10

- 卷, pp33-57, 1995
- 8) 澤田俊明, 山中英夫, 水口裕之: 交換とアイデンティティを用いた生活環境把握のアプローチ, 環境システム研究, Vol. 26, pp219-230, 1998
 - 9) 井口貢: コンセプトとしての商業文化都市, 文化経済学第2号, pp57-63, 1998
 - 10) 河原能久: 住民からみた河川環境の総合的評価について, 地域環境シンポジウム講演集, 第3号, pp141-146, 1995
 - 11) 北村貞太郎: 新たな定住地域圏の模索 Part-2: 新たな定住地域圏と農村計画学研究, 農村計画学会誌, No. 4/Vol. 15, pp53-61, 1997
 - 12) 黒見敏丈: ふるさと意識形成による農村景観保全システムに関する研究, 学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2000巻, pp481-482, 2000
 - 13) 山下暁子: 原風景の位相と教育についての試論, 学校教育学研究論集, 26巻, pp41-53, 2012
 - 14) 中村誠, 八木隼, 鎌田元弘: ふるさと意識からみたまちづくりの方向性-千葉県船橋市金杉地区を事例として-, 学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2004巻, pp621-622, 2004
 - 15) 河田悦子, 水田聖一: キャリア支援の視点に立った特別活動, 富山国際大学現代社会学部紀要, 1巻, pp71-78, 2009
 - 16) 山口幸男: 佐々木清治の郷土地理教育論-郷土地理教育論の類型化も含めて- 群馬大学教育部紀要 人文・社会科学編, 第55巻, pp. 33-46,
 - 17) リンジーモリソン: 近世における「ふるさと」考 アジア文化研究, 41号, pp. 21-38, 2015
 - 18) 池田諸苗, 禹在勇: 「郷土愛」を育むデザイン教育の試み, 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 58巻, p107, 2011
 - 19) 榎野光聰, 添田昌志, 大野隆造: 地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響, 学術講演梗概集. D-1, 環境工学I, 室内音響・音環境, 騒音・固体音, 環境振動, 光・色, 給排水・水環境, 都市設備・環境管理, 環境心理生理, 環境設計, 電磁環境, 2001巻, pp769-770, 2001
 - 20) 鈴木春菜, 藤井聡: 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, No. 2/Vol. 25, pp357-362, 2008
 - 21) 渡辺陽介: 景観との多次元的な関わりを通じたふるさと意識の醸成, 農村計画学会誌, No. 3/Vol. 21, pp472-475, 2012
 - 22) 波巖: ふるさと意識を育てる授業づくりの技術と地域調べの技術, 鎌倉女子大学紀要, 第17号, pp69-82, 2010
 - 23) 鈴木直枝, 山口孝志: 流行歌の歌詞にみる言葉の変遷-過去34年間のヒット曲を通して-, 東北生活文化大学三島学園女子短期大学紀要, 31巻, pp55-65, 2000
 - 24) 音楽のライフスタイルwebアンケート報告書2006, 財団法人ヤマハ音楽振興会, p5, 2006
 - 25) 橋本択摩: ポケット解説 人口減少と格差社会, 第1版第1刷, pp. 25-32, 秀和システム, 2006
 - 26) 高橋泰: 人口減少社会に向かう日本の医療介護の現状と将来予測 150529第2回東京都地域医療構想策定部会, pp. 1-2, 2013
 - 27) 重岡徹: 最近100年間の「ふるさと」の語られ方 農村計画学会誌, No. 3/Vol. 31, 2012
 - 28) 藤居良夫, 伊藤勝久, 大森賢一: 農山村地域における居住者の景観およびふるさと意識の統計的分析 農業土木学会論文集第164号, pp. 21-32, 1993
 - 29) 松井和久: 第7章, 日本における地域振興の歴史的展開-地域振興の制度構築に関する検討のための準備作業として- アジア経済研究所 「地域振興の制度構築に関する予備考察」調査研究報告書, pp. 161-172